慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中国における社会・経済状勢の変化が二十世紀前半の中国教育に及ぼした影響
Sub Title	
Author	笹島, 恒輔(Sasajima, Kosuke)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1977
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.17 (1977.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告 : 学位授与者氏名及び論文題目 : 博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000017-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

博　士（乙）

教育学博士

第855号　笹島　恒輔　昭和51年9月24日

「中国における社会・経済状勢の変化が二十世紀前半の中国教育に及ぼした影響」

論文審査担当者

主　査	慶応義塾大学文学部教授 同　社会学研究科委員	文学博士 村井　実
	同　法学部教授 同　法学研究科委員	法学博士 石川忠雄
	同　名誉教授 同　社会学研究科講師	文学博士 中山一義

論文審査の要旨

この論文の筆者は，かつて慶応義塾大学支邦問題研究会を主催され，中国研究の権威であった故及川恒忠教授の弟子の一人で，その方面ではすでに，三十年近い研究歴をもっている．現在は慶応義塾体育研究所の教授で，とくに中国の体育に関する著書と論文が多数あり，その一部は副論文として提出している．また，東洋教育史学会の会員で，多年その役員として活動している．この度提出した論文は，多年にわたる研究の成果である．

対象は，二十世紀の前半で，清朝は清末十年を残し，1911年の辛亥革命を経て，1950年国民政府の台湾移転までの波乱にとんだ半世紀である．その間の社会・経済状勢の変化と，それにともなう教育の変動をつかむのが，この論文のねらいである．

何故，この時期をとり上げ，社会と教育との変動の相関をつかもうとするか．それは筆者が論文中いくたびか指摘しているように，既刊の研究書は，立場の偏向・資料の取扱いなどにおいて，不満な点が多いので，その欠を補う意図をもって書かれたもので，その成果は一応成功しているもののようである．

1898年光緒24年の「戊戌変法の詔」を承けて，1902年に制定された「欽定学堂章程」は，旧学派の反対にあって，三年後には「奏定学堂章程」にかわる．ところが，満漢旧新の勢力が入り乱れて，もたついているうちに，1911年の辛亥革命がおこって，ついに清朝は亡び，民国となった．翌年でた「壬子学制」は日本を手本としたものであったが，その後，1914年の世界大戦，1915年の日本の二十一ケ条条約，1919年のパリ平和会議を経て，五・四運動という愛国的民族意識の異常な高揚の時期をむかえる．

1922年の「壬戌学制」の出るころは，情勢は一変して，米国寄りになる．これより先き，他の列強に比べて，中国進出に出おくれた米国は，1900年の北清事変の賠償金の一部を返し，これを中国人の米国留学の基金としたため，このころになって，米国帰りがふえて力を得，米国式六・三・三制を採用することとなったのである．しかも，これもやがて，軍閥間の主導権争いで内戦がつづいて，資金が不足し，教育は荒廃した．1925年，国家主義運動が高まり，上海で中国人射殺事件がおこり，五・三〇事件と呼ばれ，このため，回収教育権運動・軍事教育への要求がおこった．

1927年，国民政府の北伐が完成し，思想統一への機運が生れ，翌年三民主義をうたい上げた「戊辰学制」がでて，詳細な「課程標準」がはじめて示された．蔡元培が教育行政に仏蘭西式の大学区制を採り入れようとし，試みに浙江・江蘇両省に施行したが，旧勢力の反対の前に，わずか一年三月で廃めるはめになった．また，1929年「私立学校規程」ができて，教育権回収運動が実効を収め，教会学校の廃めるものが多くでた．

1931年「軍事教育」「排日教育」が重視されたが，時たまたま，満州事変がおこり，1937年戦争は日華事変に拡大し，その後は，戦時に即して法令が改訂され，また新たに制定されたが，やがて，1945年終戦となり，復員がはじまった．その後，共産軍と国民党軍との間に，戦闘がつづき，そして逆に，1950年，国民政府の台湾移転となった．以上は論文中の要件とおぼしきものを摘記したものであるが，最後に，共産党の成立と共産地区の教育について附記している．

この論文の価値はどこにあるか．とりあげている時代は清朝の崩壊にはじまり，民族革命を経て，国民政府の台湾移転に終る五十年間．その間に，封建軍閥．民族革命勢力，欧州列強・米露・日の資本主義諸国など，内外の大きさも，強さも，性質も，ちがういろいろな力が，その数を減じていったことは顕著な事実である．中国は，たくさんの中心をもった一つの円の如きものであった．一つの国家というより，一つの世界の如きものに近かった．

従って，この論文を一読したときの印象は混沌の一語に尽きた．この論文の筆者は，それを承知しているものの如く，論語の「邦無道，言孫」という戒めを自ら固く守って，偏った言辞を極力避け，この論文を一貫する方針としている．

再度読み直して，さすが長年手がけているだけに，複雑極まる歴史の動きを，いくつかの項目にわけ，各項目について手ぎわよく，平明な文章で，担々と叙述していることがわかった．あまりの手ぎわのよさに，学術論文

たることをわすれさせられることもあった．

併し，この論文の真価は，混迷する歴史事象の解明にあるというよりも，歴史の「真実」を行間や文裏に感得させるところにあるように思われる．「真」をつかむことも大切であるが，そのつかんだ「真」を言表せねば歴史にならぬ．打ちつづく戦争と混乱のために，「学制」が公布され，「制度」が生れても，空文に終る．中国人は，この五十年間，「制度」によって教育されたのではなく，「乱世」の現実に学んだというのが「真」であるらしい．この論文は，その「真」を見事に言表している．

以上，この業績は学界に寄与するところあり，筆者は教育学博士の学位を受けるに価することを認める．